

悪役令息イアン・ラッセルは  
婚約破棄したい

## 目次

悪役令息イアン・ラッセルは婚約破棄したい

7

番外編 最愛を堕とすまで

255

# Characters

## ◆アルフレート・ジェニングス◆

第二王子でイアンの婚約者。  
イアンの塩対応でどんどん距離が開き、  
神子に夢中になっている  
様子だったが……？

## ◆レノックス◆

平民上がりで騎士を  
目指している。  
真面目で堅物。

## ◆ハロルド・ジェニングス◆

第一王子でドミニクの婚約者。  
無表情な弟とは違い、  
いつも綺麗に微笑んでいる。

## ◆ローズリー◆

平民上がりの神子。  
神によって男を  
狂わせてしまう運命にある。

## ◆ドミニク・ウォーターズ◆

立場が入れ替わるかもしれない不安から  
イアンのことを敵視している。  
美しさと可愛さが混合する圧倒的美人。

## ◆イアン・ラッセル◆

ラッセル侯爵家の次男。  
幼い頃に突然前世を思い出し、  
悲惨な最期を迎えないよう婚約者に塩対応中。

悪役令息イアン・ラッセルは  
婚約破棄したい

## プロローグ

「イアン・ラッセル……婚約を破棄したい」

イアンは目の前に座るこの国の第二王子殿下をじつくりと眺めた。

金の髪に陶器のような肌、麗しいその碧眼を縁取る金色は頬に影を落としている。決して女顔というわけではなく、かと言って野性的というほど男くさいわけでもない。長身で体格もほどほどに良く兎にも角にもバランスが良い。王家の人間は大抵驚くほど容姿が良いのだ。神話を事実とするならば神と人間の子孫とされるので、同じ人間とは思えないほど整っているのも当然なのかもしれない。

そんな薄気味悪いほどの美麗な顔がイアンをジッと見返してくる。温度の無いかなり無機質なその視線は、一応の婚約者である己に向ける視線に相応しいとは思えない。ただ、相対するイアンも

眉一つ動いていないので、似たり寄ったりではあるが。

冷えた空気の中、今の心境をうつかり表情に乗せないよう、まだほのかに温かい紅茶で喉を潤す。焦らすようにゆったりと何度もカップに口を付け、時間をかけて中身を全て飲み干すと、イアンは徐に両腕を上げて、これでもかというほど力いっぱい大きな丸を一つ作った。

「……は？」

第二王子殿下の間抜け面を見たのは、後にも先にもこの時だけだった。

## 第一章 楽じゃないのよ、人生は

「イアン様、おはようございます」

「んー、おはよ」

できる従者兼護衛のニールの声に爽やかな笑顔を返す。この世界に生まれてからというものの寝起きは頗る良いので、そのままグッと伸びをして立ち上がった。その様子を見ていたニールは、さり気なく扉を開いて洗面所へ誘導してくれる。そのまま洗面所へ向かい顔を洗い歯を磨きつつ、イアンは密かに電動歯ブラシが欲しいと思う。

実はイアンには誰にも言ったことのない秘密があった。

己の前世であろう記憶があることだ。

時折頭を掠めるそれは、一人の男が地球という星の日本という国で生まれ死んだ記憶だった。これと言って特筆すべきところもないが、家族は父と母に妹がいて一般的な仲の良さだった。ほんの少し異質だったのは、妹が腐っていたことくらいだろう。兄であるその世界のイアンはそんな腐った妹に死ぬほど甘かったので、当然のようにボーイズラブするゲームの手伝いをし、あらゆる

な漫画やアニメの萌えを語られ、趣味でもないその筋の知識が無駄に豊富にあった。

普通の学生生活を送り普通の一般企業に勤め、平凡だけど笑顔が可愛くて家庭的な優しい女性と結婚して子どももいた。ただ、五十半ばに会社で倒れてからの記憶がないので、恐らくそのまま死んだのだろう。心臓発作とかそういう類だったのかもしれない。

子どもはもう大きくなっていて、生命保険や貯蓄があったので妻共々大丈夫なはずだ。妹は腐った趣味に理解のある男性と結婚し子どももいたし、両親は第二の人生をエンジョイして旅行三昧だった。きつと皆悲しんでくれただろうが、支えてくれる人がそれぞれにいたので、そう心配もしていない。

そんな風に冷静に前世の記憶を整理していた。正確に言えば今世の己と前世の己は別人格であるという想いが強く然したる未練はない。万が一前世の記憶に引き摺られていたら、皆に会いたいと毎日泣き暮らしていただろうから、それでよかったのだと思う。

前世の記憶はあれど、まごうことなくイアンとして生まれ、生きている。前世のような娯楽が少ないことは少々不満だが、自身で何とかしようと思いつくことも無く、今世に馴染もうとしているのが今のイアンだ。

「よし、終わり。お腹空いた!」

軽く身だしなみを整えると小さく腹が鳴った。どんなに憂鬱な朝でも腹は減るのだ。己の腹の音

を聞きながら、広い屋敷の中を歩きダイニングルームへ向かう。長い廊下を歩いていると、隣とも後ろとも言えない位置を保ちながらついてくるニールが口を開いた。

「皆様、既に朝食はお済みです」

「あ、そうなんだ。兄様は？」

「旦那様に付き添って領地へ視察に」

「母様は？」

「本日は体調が良いとのこと、サンルームで編み物をしておいでです」

「体調が良いなら安心だね。でも父様が帰ってきたらまた大げさに心配するんじゃない？」

イアンからかの揶揄ったような口調にクスクス笑うニールは、男ながらに小柄で可愛いタイプの人物である。こげ茶色の髪で白い頬にはうっすらと雀斑そばかすが散っていて子犬みたいだ。しかし子犬のような見た目に反して、磨き上げた護衛術でニコニコしながら、自身より大柄な不審者を簡単に捻じ伏せてしまうのだから人は見かけによらない。

「昼すぎには王宮へ向かいますので、朝食が終わったら準備が必要ですが……」

「準備の前に少し母様のところへ顔を出すよ」

「承知いたしました」

「まあ、あちらも俺に興味はないから、そんなに気合いを入れなくても大丈夫だよ」

「……そろそろ王家に苦情を入れてはどうでしょうか」

「大丈夫大丈夫。もう少しだから」

イアンのスケジュール管理もニールの仕事なので、毎朝一日の予定をニールから雑談交じりに聞き、己の頭の中の予定と擦り合わせる。多少不穏な会話になったが、ニールはイアンの様子を見てそれ以上余計な話しはしない。

重い気分を吹き飛ばすように小さく鼻歌を歌いつつ辿り着いたダイニングルームは、他家に比べてもかなり広い部類に入る。ラッセル家は領地に比例するように屋敷も大きいのだ。既に給仕が待機しており、席に座ると次々と美味しそうな朝食を出してくれた。

「わっおいしそう。いただきます」

洋食だが味は美味しい。変に日本での記憶があるため、偶たまに強烈に和食を食べたくなるのだが無いものは無いので我慢している。

ちなみにこんなに洋風な世界でも食前の挨拶は「いただきます」で食後は「ごちそうさま」だ。この世界が日本発のBLゲームだからだろうか。その辺はよく分からないが、当たり前のことなのでイアン以外の誰も違和感を抱いてはいない。

そう言えば、その当たり前の挨拶に初めてヒヤリとしたのはいつ頃だったか。もうよく覚えていないけれど、かなり幼かった頃から度々感じる違和感。いつも通りに「いただきます」を口にする

と、前世の臃げな記憶が重なり何となく冷や汗をかく、ということがしばしばあるのだ。もちろん周りも同じ挨拶をして手を合わせるので、作法を間違っているわけではないのだが、一瞬ヒヤリとするその感覚はわりと今も続いている。

他にも違和感を覚えたことは色々ある。例えば髪を乾かすのはドライヤーだと思っていてそれが無いのに驚いたり、夜遅い時間に甘い物が食べたくなってコンビニに連れてつてと駄々を捏ねてみたり、小さな頃は様々な場面でそれなりにやらかしている。拙い言葉な上、おそらくこの世界の言語ではなく日本語で発音していたので「あらあら想像力豊かね」「まだ言葉がうまく話せないからもどかしいのかしら」と流されていたから、誰にも気づかれてはいない。どちらにしても幼少期は相当変な幼児だったと思う。

「ごちそうさまでした！ 料理長に今日も最高においしかったって伝えて」

「はい、確かに」

ゆつたりと食事をし、白々しいほど元気いっぱい挨拶をすると、給仕係がニコリと笑い頭を下げる。それを目にすると少し急ぎ足でサンルームに向かった。

噎せ返るような香りが鼻腔を擦り、目には眩しい色とりどりの花。そんな空間の中で一人の男性がにこやかに微笑みながら編み物をしていた。美しい黒髪が艶めき、その白肌は太陽の光を浴びて透けてしまいそうだ。薄っすらと聞こえる鼻歌の声は男にしては高く、女声というには低い。彼の

唇が柔らかく動く度、邪魔にならないように控えている従者がうつとりと感嘆の息を漏らしていた。

「母様！ 体は平気ですか？」

「イアン、おはよう。今日は体調も良いですよ。もう朝食は食べましたか？」

「おはようございます。朝食はいただきましたよ」

少し心配そうな顔をしているこの絶世の美青年が、何を隠そうイアンの母親である。テーブルに座ったままの母の対面へ座ると、相変わらずの麗しさに従者と同じくうつとりと顔を崩した。

「昨日は疲れたでしょう？ もう少しゆっくりしても良いですよ」

「ありがとうございます。でももう十分寝たので元気です！ 今日は時間もあまりありませんね」

「そうですね……準備がありますからね」

母が心配しているのはイアンの精神状態だ。本日は王宮へ出向かなければならないし、昨日は小規模ではあるが第二王子殿下派のトップが主催した茶会に参加していた。嫌なことが二日も続くので実はかなり心配されているらしい。すれ違う使用人たちの目にも労わりの色が見え隠れするので、疲れを全く隠せていないのだろう。

「まあニールがいますから、準備はしっかり間に合います」

「良かったです。昨晩は少し帰りが遅かったから心配していたのですよ。イアンは社交が苦手でしょう？」



「そうですね、でも随分マシになりましたよ」

「ええ。イアンが苦手と思っているのが不思議なくらい、皆さんからの評判はいいのよ」

ふふふ、と微笑む母にヘラリと笑みを返す。そもそもイアンが茶会や夜会に楽しみを見出せず苦手意識を持つ一番の原因は、前世の記憶による弊害だと言っている。確かに記憶は記憶ではないのだが、それでも身分差の少ない社会を知っている。記憶の中の前世と今世では振る舞いから表情の作り方、喋り方にすら大きな違いがあり、貴族連中と少し話をするだけで精神的負担が大きい。貴族社会は社会人経験のある大人の男の記憶の数倍、足の引っぱり合いが凄いのだ。しかも幼少期からそれなのだから好きになれる要素が無い。

イアンが平民として生を享けていれば、案外気苦労なく生きていたかもしれないと思う。だが現実には高位貴族として生まれたため、どこか堅苦しかったり、周りの人間と己のズレを頻繁に感じたりするのだから儘ならない。けれど、お金に困ること無く高い教養も身に付けられる家に生まれたことは幸せだ。家族仲も良く愛情たつぷりに育てられているので恵まれていると理解している。だから家族に報いるためにも、少々面倒だとしても文句ばかりも言えない。

例えば嫌々でも社交さへ身に着けてしまえば気苦労も減るし、小さな失敗なら見逃されるのも今のうちだ。嫌だからといって駄々を捏ねられるほど中身が幼くはないのだから、一応は克服しようとして頑張っている。一口に克服とはいっても好きになることは一生ないだろうが、慣れるより他ない

のだ。

そういった理由から、イアンは第二王子殿下の参加しない、同派閥の社交場にだけはなるべく顔を出すようにしている。会話がメインの茶会などは特に大嫌いなのだが、社交場では完璧に見えているらしいので、なんだかんだと貴族が板についてきていると自負している。

幼い頃のイアンの話し方は、普段は穏やかな講師がブチギレそうになるほど酷かった。これはもう癖づけるしかない、家族の前ですらかわい子ぶったような口調で丁寧話すのも、ボロを出さずに過ごせている理由の一つだ。

「無理をしていないのであれば良いのだけれど」

「全然問題ないです。それにもうすぐ社交も増えてきますから、これくらいじゃ怠けてもらえません」

フフと控えめに微笑む母は、父といつまで経っても見てられないくらいにラブラブだ。それを体現するように再び教会へ出向き子どもを宿した。結婚する時に子どもは三人欲しいと話していたらしい。母も父も十八で結婚して、一年過ぎた頃に一人目の子どもができたのでまだまだ若い。子ども二人が手を離れたので体が元氣なうちにもう一人、と思ったそうだ。

そんな状況なので今屋敷中が殊更、母に対して過保護に接している。父なんかは行き過ぎて見つとも無いくらいだ。三人目なのだから少しは落ち着いて欲しいのだが、どう考えても無理そうで

ある。ちなみに母は毎日退屈気味だそう。それでも幸せそうにしているのだから誠に良きことである。

「では、僕はもう行きますね。準備がありますから」

元氣そうな顔色を見て安心したイアンはその場を去ろうとしたが、母は一瞬何か躊躇ったように視線を泳がせた後、口を開いた。

「今日は久しぶりの王城でしょう。イアン……あなた本当は……」

「母様、大丈夫です。何事も順調ですよ」

サラリと母の言葉を途中で止めニツコリと微笑む。この屋敷に主となる人間を裏切るような者はいない。だが、人の口に戸は立てられぬのも事実。王家が不敬と感じかねない言葉を家族に口にして欲しくないのだ。己は良い。何だかんだ今まで何ともないし、順調に世界は回っている。万が一、何か気に障ったとて己一人の罪だ。しかし一体何が原因で人生が左右されるか分からないので、イアンは家族の発言には少々敏感だ。

「……そうですか……そうですね。少し心配すぎましたね」

「ええ。僕はとても恵まれています」

イアンは母の膨れたお腹を見て目を細めると、軽く挨拶をして少し急いでサンルームから自室に戻る。家族との間にある空気感はいアンにとって幸せでしかない。ほんわりとした温かい気持ち

抱え、少し急ぎ足で歩を進めた。ほんの少しゆっくりしすぎてしまったため、付いてきてくれてい

るニールに声を掛ける。

「ニール、時間は大丈夫だよね」

「ええ。このニールにお任せください」

「さすが僕のニール」

母だけじゃなく他の家族もニールも、今のイアンをとて心配してくれている。けれどイアンは既に対策を講じているのでそこまで現状に不安を抱いてはいない。多少不快に感じることはあるけれど、それももう少しの間だけのはずだ。もうすぐこの歳になるまで振り回されてきた何もかもとおさらばできる。そう気を奮い立たせて先を急ぐ。頭の中に浮かぶ今までの彼<sup>あれこれ</sup>を思い出しながらコッソリ微笑んだ。

（もうすぐ自由になるぞー！ あと少しの辛抱だ！）

今でこそ前世の記憶を記憶として受け入れているが、幼き頃はもつとずつと曖昧だった。そんな前世の記憶が鮮明に蘇ったのはイアンが六歳の頃だ。薄らぼんやりと思い浮かぶ別世界のことを、それまではまだ特に気にかけてなかった。

しかし、記憶が完全に蘇るターニングポイントは突然やってきたのである。



大きな鏡の前でニールが一生懸命にイアンを磨き上げる様子を眺めながら、全てを悟るきっかけになったある日の出来事を思い出す。もう臃<sup>おぼろ</sup>げだが、幼いイアンが王宮に初めて御呼ばれた日。その日からイアンの意識は大きく変わった。

今思えばアレは王家のご子息たちの友人、もとい側近になる者たちを選別、或いは婚約者を探すための集まりだったに違いない。

ともかく何も知らない子どもたちはイアン含め、初めて見る白亜の城と広大な敷地に設けられた裏庭、見たこともないキラキラした大量のお菓子に興奮していたのを覚えている。まだ身分等もあり関係なく複数人で無邪気に遊んでいたはずだ。だがイアンはなんと、王家の広大な裏庭にある小さな池で溺れたのだ。誰かと体がぶつかった気がしたが、その子が無事だったのかすらも覚えていない。イアンは当時、どうやらはしぎすぎていたらしい。

見た目は綺麗とはいえ不衛生であろう池の水を飲んだイアンは、その夜から当然のように熱を出しそのまま体調不良で一か月近く苦しんだ。そこから断片的どころか膨大な前世の記憶を次々に思い出し始めたのだ。体調不良が長引いたのは絶対に知恵熱もあつたとイアンは確信している。

そんなこんなで熱が治まって徐々に体調が良くなり、膨大な記憶を少しずつ整理していたイアン

は気づいた。この世界は前世の妹が一時期ハマっていた、鬼畜で肌色の多い、そんなに人気でもなかった、十八禁のBLゲーム。君の隣で誰が笑う。略して「キミ誰」の舞台と似通っていると。

鬼畜十八禁BLゲームというだけあって、そのゲームは物凄くエロ特化型だった。性質上、主人公は色々エロ方向で悲惨な目に遭う。玩具、薬物、強姦、複数、公開プレイは当たり前。なんなら全く関係ないモブにも無駄に襲われるし、イケメンばかりを手玉に取るので、メインのイケメンたち以外からは死ぬほど嫌われる。

『——いやいや、何の過去もないんかよ！ おかしいだろ』

『何もなくてもいいのよ。そういう影があるっぼいのがウケんの！』

『でもさ、普通は背景を掘り下げてそこで感情移入したり……』

『おにい、これ、エロ見るためだけに作られたものよ？ エロさえ気合いが入ってて絵が綺麗ならそれでいいんだから！』

『わからん。全く理解できん』

遠い過去の妹の声が思い出された。そう言えば攻略対象者は全員、特に悲しい過去などないのにほんのりヤンデレ要素がある。今世になってもその辺りの設定は意味不明だ。対する主人公はエロ特化のため、直ぐに体は快楽堕ちする癖に精神が異常に強かった。誰に襲われようと誰に嫌われよ

うと、恋愛に突き進むタイプの人間だ。主人公を動かしているのがゲームをしている人間なのだから、当たり前と言えば当たり前なのだが、現実にはとすれば怖すぎる。

そしてイアンはそのゲームのパッケージに一番デカデカと描かれた公式ヒーロー、の後ろで少し小さめに描かれた、そのヒーローの弟の婚約者だ。つまり第一王子殿下と第二王子殿下、どちらも攻略対象かつどちらにも婚約者がいる設定で、第二王子殿下がイアンの婚約者になる男である。弟の方いる？ 要らないよね と何度思ったことか。この半端な設定も人気が出なかった原因の一つだと思う。絵がとても綺麗だったのに勿体ない。

なんにしてもイアンと第二王子殿下は幼い頃からの婚約者で、学園を卒業したら正式に結婚すると決まっている。だが学園生活二年目が始まってすぐ、突然現れた平民である主人公に婚約者の心を奪われてしまうわけだ。イアンからすると死ぬほど面白くないだろう。

王家に嫁ぐのだ。生半可な気持ちでは無理である。正に、三百六十五日ほぼ休みなく城へ出向き、厳しい花嫁修業もと王妃教育が行われる。通常の流で行けば第一王子殿下が王座へ、第二王子殿下は臣下として国のためにあくせく働く運命にある。しかし、有事が起きた時のスペアでもあるため、万が一を考えて第二王子殿下にもそれ相応の教育がなされ、その婚約者にも王妃教育が施されるのだ。

青春を過ごす時間など一日もないし友達もできるわけがない。唯一の心の拠り所は婚約者なのに、

目の前で主人公とイチャイチャセックスされてみる。想像するだけで悲惨である。悲しみと怒りで心が壊れたゲームの中のイアンは当然のように主人公を恨み、苛め抜き、最後には殺そうとする。

しかし、杜撰な殺人計画は当然、見事に失敗。主人公は傷一つ付いてない体で、沢山のイケメンに守られて困ったように微笑み罰の軽減を求めるが、周りのイケメンたちがそれを許さず、イアンはよくある断罪劇へと引っ張り出されるのだ。

好きな子を苛められたのだから同じくらい傷つきたいのだろう。攻略対象者たちのその気持ちは痛いほど分かる。イアンが罰せられるのは妥当だ。しかしなんだか腑に落ちない。婚約者がいるのに他者に堂々と手を出した攻略対象者たちも何か罰を食らうべきでないかと思うのだが、まあ所詮はゲームだ。

イアンはそうしてその身を墮とす。主人公がハッピーエンドだとイアンは修道院行きになるだけだが、バッドエンドだとなぜか悪役令息の最期まで鬼畜仕様になる。ゲームのイアンの場合だと確か男娼に墮とされ好きでもないおっさんたちに好き勝手抱かれ心が壊れたまま衰弱して死ぬ。なぜ主人公の進むエンドの種類で悪役令息の命運まで変わってしまうのかは謎だ。イアンだけじゃないが、攻略対象者の婚約者たちは大抵、皆が悲惨な目に遭う。

前世のイアンは死んだ目でスチル埋めのためだけに、各ルートのハッピー以外のエンド回収をさせられていたのだが、どれもさまあと思うよりも可哀想でとても不快だった記憶がある。悪役た

ちの最期は流石にスチルじゃなく文章でサラッと伝えられる程度だったが、インパクトが強かった。かつての妹はその可哀想なのが妄想が捗<sup>はかど</sup>って良いと言っていたが、その趣味だけは最後まで理解できなかった。

どうでもよいことであるが、妹の攻め推しキャラは未来の宰相候補で、そのルートで出てくる悪役の婚約者が受け推しキャラだったことを思い出す。そのためか、そのルートのバッドエンドは受けがどうなったかの一文を見るために己で回収していたので、それだけは終<sup>つい</sup>ぞどういった結末を迎えたのか知ることはなかった。

何にしてもこのゲームのことは色々腑に落ちないし、前世の妹の趣味は理解できないはまだ。

「お洋服は一式全て揃えております。一応、第二王子殿下の色味を入れたアクセサリーも準備しておりますが」

「相手の色のものはいらない。見られてないから問題なし！」

「承知いたしました」

顔や髪の設定が終わると、今度は無駄に装飾の付いた服を着る番だ。順番が逆の方が良さそうなのだが、イアンは正装が好きではない。動きづらいし汚すといけないし何も良いことなどない。特に化粧を大げさに施すわけでもないし、基本前開きの服が主流なので、ニールがイアンに合わせ苦痛にならないように着飾ってくれているのだ。他家ではどうなのか知らないで、そもそもそ

ういうものかもしれないが。

ニールはイアンの様子を心配そうに眺めながらも、素早く着替えさせてくれる。正直己で着替えられるものだが仕事を取るわけにもいけないので、こんな時はいつも指示されるがままクルクル体勢を変えて大人しくしている。

（もし俺が女なら豪華なドレスが用意されてて、流石のニールでも一人で対応するのは無理だろうな……うわぁ今気づいた。もう女性の姿が臍<sup>はら</sup>げになっちゃってるよ……）

鏡の中の着飾られていく己を見てみると、ふとそんなことを思った。今世と前世の世界の違いは沢山あれど、大きな違いの一つはそもそも女性が存在しないことだろう。女性がいないと人類は滅亡の危機に瀕するところであるが、当然対策がなされている。女性がいないならば男同士で子どもを産めばいいじゃない、ということだ。

これも記憶が落ち着き、ゲームのことを思い出してから、そういえば……とやっとな疑問を感じたことである。自身の母が男であることに全く違和感がなかったのも、暫くは不思議にも思っていた。元々ご都合主義のゲームの世界とはいえ、まさか現実にも反映されているとは恐れ入る。物語が男だけで完結するので、ゲーム上では女性が存在しない方が都合が良いのだろう。それが当たり前前の世界なので特に嫌悪感はないが不思議だとは思う。

もちろんすんなり自分の中に落とし込めたわけではない。疑問を覚えてしまえば途端に、前世の記憶の中にいる柔らかな曲線の女体を思い浮かべては混乱したりしていた。異性愛者であった前世

の記憶と、男同士で好き合うことに何の躊躇もない今世の人格が闇くろき合っていた時期は、周囲からすると突然、蹲うつすまったり唸うなりったりする危険人物だったと思う。

ちなみにゲームをしていた頃から思っていたが、教会で祈りを捧げると小さな光がふよふよと現れ、なぜか必ず受け側の腹に入って、そこから突然命宮と呼ばれる器官ができ、両親がやりまくと妊娠し、十月十日で腹から大きくなった光が再び現れ、そこから子どもが生まれるというのはいかに無理のある設定だと思う。勉強中に何度も頭に浮かんだ「リバカップルの時はどうなるのですか」という質問はなんとか控えたが、英断だったに違いない。

「イアン様、もう少しで終わりますから寝ないでくださいね」

「ごめんごめん。寝てはないよ大丈夫」

色んなことを思い出しつつうっかり目を瞑って頭を下げてしまった。正直、暇なのだ。ニールに愛想笑いを浮かべつつまた頭を上げてキリリとした顔を作っておく。服を着てしまうと最後にアクセサリーを身に着けなければならぬ。再び鏡の前に座らされ、ピアスやらネックレスやら指輪やらで、派手にならない程度に飾り付けられるのだ。複数ある候補から真剣な顔をしたニールが選んでいるのを横目に、小さく欠伸を囁み殺した。

(それにしても、ここまでゲーム通りに進むなんて怖すぎるよなあ)

色々とゲームを思い出した当初は、己の人生で一番の絶望と混乱に満ちていた時期だと思う。池に落ちて一か月近く苦しみ抜きやつと元氣になった頃、*“絶対に婚約回避するぞ”*と鼻息荒く決意したものの、まさかその数時間後オノー！と泣き崩れることになるとは夢にも思わなかった。こういった経緯があったかは未だ知れないが、イアンが病に臥ふせている間に既に第二王子殿下の婚約者に納まっていたのだから、このゲームの強制力は侮れない。

非情な現実に対峙した当時のイアンは咽もどび泣き、よくある転生モノの漫画や小説等を必死に思い出しこの世界と比較した。

まず俺TSUEEEはできない。この世界には一応魔法のようなものはあるが、使用できるのは極一握りの人間だけであるし、どんな魔法があるかも正直よく分からない。

そもそもドラゴンや魔王のような存在はお伽話の中だけであるし、スタンピードに至っては長い歴史の中で一度も起きたことはない。魔物はいるし脅威ではあるが冒険者や騎士が討伐していて、被害はあれど現状この世界が減じるほどのものではない。つまり一番楽しそうな、魔法での無双はできない。

次にこの世界の特徴と言えば、神子という存在が語り継がれていることだろう。神子とは簡単に言えば神の遣いである。嘘か本当かはさて置き、一先ず神子が現れたらば、その国のその代はとて

も栄えると言われていて、魔法使いよりもずっとずっと特別な存在だ。しかしその役はイアンに割り当てられたものではない。

当然のように主人公がその神子である。この世界では生まれた子どもが無事に三歳を迎える頃、平民貴族関係なく必ず一度教会に向かう。そこで神の祝福として生誕の儀式をするのだが、その時に使用する神玉が白く光ると神子なのだとされている。儀式が三歳で行われる理由は、その歳が無事迎えるまでは神の身元に魂が在るとされており、本当の意味で生まれたとされるのがおぎやあと泣いて誕生してから三年後だと言われているからだ。

また、後天的に神子と判明する者がいるかもしれない、ということとで十五の歳にもう一度簡単な儀式をすることができる。未だかつて二度目の儀式で神子と判断された人間はいないので強制ではなく任意だ。本来必要のない二度目の儀式は、何代目かの王が自身の代に神子が現れないことに納得がいらず法を変えたことが始まりだ。一時期は強制だったらしいが結局神子が現れることはなかったのも、数代後の王が法を改正したらしい。国民が二度儀式をすると教会の負担が大きいため改正したとも伝えられている。

ともかく、今まで二度目の儀式で神子が現れた事例などなかったのだが、ゲームの舞台ではその「絶対」が崩れる。

主人公が偶々少し遠出をして野菜を売りに出たところ、教会の人間がやたら野菜を買い取ってくれたのがことの始まりだ。善良な主人公は量の多さから運搬を手伝い、その際の何気ない会話から

二度目の儀式をする機会がやってきたはずだ。神子は心が乱れば未曾有の自然災害を起こす存在だと言われているので、突如現れた神子に教会は飛び上がるほど驚いたに違いない。それどころか、ポロポロの服で野菜を売っている姿を見て、心臓が一回くらい止まったかもしれない。

さて、このように転生したとてイアンに割り当てられた役柄は特別な存在ではない。物語を盛り上げるための当て馬だ。一応体を鍛えたりもしてみただけで突出した才能はなかった。勉強にしたりしてほどほどに成績は良いが、飛びぬけて良いわけでも天才でもない。そんなイアンが、あの日から何か派手に行動を起こしていたとして、すんなり婚約者から外れることができたろうか。正直王族相手に高位とは言え、たかが貴族ができることなど限られているのだから、悪い方向にしか向かなかっただろうと思っている。

結果的にあの時から今に至るまで、イアンは派手に行動を起こしてはいないが、着実に第二王子殿下にとって「不要物」となり下がっていた。きつとこれで正しかったのだと言い聞かせるのは、一度や二度じゃない。

「こちらと、こちら、それからこちら一度身に着けていただいて少しバランスを見ますね」

「うん、よろしく」

ニールが選び抜いた装飾品をこちらに見せて意思を確認してくる。婚約者や恋人や夫<sup>ふう</sup>夫<sup>ふう</sup>などの間

では、己の髪や目の色のアクセサリーを贈り合うことが主流だ。だが、イアンは余程の状況じゃない限り己の色を身に着けるようにしている。己の髪や瞳が黒色のため、イアンの装飾品は黒っぽいものが多い。今ニールが提案してきた装飾品も濃淡に違いはあれど全体的に黒っぽい。楽しそうにイアンを着飾っていくニールには悪いが、正直イアンにはどうでもいいことなので、ニールに意見したことはない。

鏡の中の己の顔を眺めつつ、ゲームの主人公を思い浮かべて身震いする。イアンからしてみれば主人公は人外染みていた。ゲームプレイ中あれだけ鬼畜エロに襲われていたというのに、災害描写がなかったという点から一度も精神を乱してなかったことになるからだ。主人公の精神が鋼すぎて怖い。そんな人と対等に渡り合い王子の心を繋ぎ止めるなんて無理だし、なんなら別に第二王子殿下のことは好きでもなんでもないから、巻き込まないで欲しいと心から思っている。

「さあ準備は整いました。いかがですか？」

「うん、見られるようになったよ」

「イアン様は元々美しいのですから当然です」

ニールに磨かれたイアンの姿は美しかった。主人公のライバルキャラなのだから当然である。「面倒くさい」「今すぐ逃げ出したい」という気持ちを頭を左右に振って追い払い、気合を入れて玄関へ歩いて行く。すれ違う使用人たちの心配そうな表情にとびきりの笑顔を返しながら、やたら豪華な屋敷を出ると、自家の馬車へ乗り込んだ。



ニールが馭者やしゃの隣に座ると、馬車の中はイアン一人になる。

「折角休みののにさあ」

王宮へ辿り着いてしまえば暫し堅苦しい時間が続く。面白くも無い時間のために休日が潰されるのは不快だが、仕方がないことなので大きな溜息を吐いて鬱憤を晴らす。

年々苦痛になる第二王子殿下との交流は、迦れば随分前から続いている。残念ながら婚約者になったことを知った次の日、第二王子殿下は婚約者を見舞うという名目でラッセル家にやってきた。イアンの記憶上ではそれが初めてまともに言葉を交わした日である。

イアンはその時、既に婚約解消、最低でも婚約破棄を目指す決めていたのだが、相手は歩く国家権力だ。いくら高位貴族とおおきな対応はできない。立場的に無視はできないしラッセル家側からの婚約解消も難しい。そもそもまさかそんなに早くお目見えするとも思ってたので、そう熟考する時間もなかった。そこで慌てて思いついた目的を達成するための手段は、出力が最低値で済む相手への無関心を装うことである。

『イアン、体はだいじょうぶか？』



『だいたいようぶです』

『くだものをもってきた。この中に好きなものはあるか？』

『きらいなものはないです』

だが意外にも無関心であることは難しかった。同じ年で、なんなら精神年齢が上のはずのイアンよりも随分成熟しているらしい第二王子殿下は、殊更柔らかに微笑んでイアンを気遣った。振る舞いも言葉遣いも既に大人と言っているほど落ち着いている彼は、必死にイアンに言葉をかける。

『俺たちはこんやくしやになった。もう聞いただろうか』

『はい』

『これからよろしくな、イアン』

『はい』

『……何か好きなたべものはないか？ ほしいものも、なんでももってくる』

『またくるんですか』

『……きてはいけないのか？』

『いいえ』

この頃の第二王子殿下は今よりずっと表情が豊かだったように思う。機械的に、意識的に話を広げないように返事をするイアンに、彼は悲し気な表情を何度もしていたがイアンは酷い態度を取っていた。

『……今日はつかれているのか？』

『いいえ』

『俺とはなすのは、いやか？』

『いいえ』

『そうか……ではまたくる』

『ありがとうございます』

暫くは何が好きか、何が欲しいか、普段何をして遊んでいるか、と色々な質問をされたけれど、結局、第二王子殿下は悲し気な顔をして肩を落とし帰っていった。

それを見て胸を酷く痛めたけれど、イアンは知っていた。彼はこんなに優しく接しながらも、あれだけ尽くしていたイアンをあつさり捨てるのだ。イアンは不思議なくらいに己の心に憎しみにも似た強い感情が滲み出ているのが分かった。全く好きでもなんでもない第二王子に対して無関心でいることはとても簡単だと思っていたのに、この湧き出る妙な感情はなんだろうか。

それだけじゃない。前世のおっさんの記憶があるはずなのに、目の前の幼子が誰よりも輝いて見えるなんておかしいし心拍数も異常だった。その上、何とも言えない重くドロドロした、決して幼子が抱くようなものじゃない掴みきれない感情まで抱きつつある。そこに純粹なトキメキは一切なく、ただ脳が痺れて心が震えているような飢餓感。当然、顔だって引き攣る。心も体も近づきたくなかった。このまま近しい存在になれば少しづつ心臓は爛れて、いずれ己を捨てるはずの幼子に溺れるのだと何となく分かった。

イアンは己でも理解できない心のざわめきが、とても恐ろしかった。

ゲームの中のイアンのように見つとも無く足掻くなんて嫌だった。傷つきたくないし死にたくもなければ、知らないおっさんに犯されるのも修道院で一生暮らすのも嫌だ。粉々になると分かっているのに心を奪われに行く真似なんて当然絶対に無理である。

イアンは良くも悪くもおっさんであった頃の記憶が、知識として頭に残っている。心を奪われ捨てられた先にある痛みや恐怖をリアルに想像できてしまうし、世界の強制力もあるのだと思うと関係改善に向けての活力など全く湧かなかった。

であれば、キツパリサッパリそんな気持ちを無かったことにする他ない。イアンは滲み出てくる心のざわめきを切り刻んで、あっさりとゴミ箱に捨てた。だが、王妃教育のため王宮へ出向けば第二王子殿下とすれ違う。生活圏内に頻繁に出向かなければならないので仕方がないが、イアンはそ

れがとても億劫<sup>おっくう</sup>だった。

『イアン、次の夜会は出席しなければならぬ』

『はい』

『俺が贈るものを身に着けてほしい』

『分かりました』

『……イアン、今度何処かに買い物にでも行かないか？ お前の好みも知りたい』

『何を貰っても嬉しく思っております』

『そうじゃなくて、俺はもつと二人で』

『この後、王妃教育が控えていますのでそろそろ失礼します』

十の歳になつても第二王子殿下は、会えばこうしてイアンとの会話を試みしてくれる。それに引き攣った笑顔で当たり障りなく短く返答し、すぐに表情を消してスルリとその場を去るのが常だ。恐る恐る伸ばされたその手を、見えていないとでもいうように己の視界から外す。傷ついた顔をする彼を見て胸を痛めると同時に、少しばかり憎らしい気持ち湧きあがる。が、第二王子殿下に対する感情はどんなものでも、すぐにボコボコに殴って捨てた。

『イアン、茶会だ』

『生憎、今月は予定が詰まっております』

『前々回もそう言っていたと記憶しているが』

『ええ。その前々回と同じ理由です』

『そうか』

十二の歳の頃には第二王子殿下がイアンに向かって微笑むことはほとんどなくなっていた。義務的に度々誘われることはあれど、口数は随分減ってイアンの好みを探ることもなくなった。互いに表情も変えず言葉を交わすだけという事実、身勝手ながら怒りにも似た気持ちが燦る。それでもその気持ちをクルクルと丸めて踏みつけてしまえば、どうということもない。

『来週、昼頃に』

『承知いたしました。先月は申し訳ございませんでした』

『いい、把握している』

『さようで』

適当に頭を下げその場を離れる。十四にもなると、ほぼ単語を投げ捨てるような会話とも言えな

いやり取りだけになった。第二王子殿下の手は、もうイアンを追いかけることはない。相変わらず心の奥にしつこく現れるモヤモヤは滲み出ると同時に鉄バッドで遠くに打ち飛ばす。これでこのまま距離が空けばきつと何があっても平気でいられるはずだ。そうしなければならぬ、とイアンは彼を見かける度に思う。

『茶会だ』

『はい。今回は伺います』

『そうか』

十五で学園へ入学し半年も経つと、王宮や学園の廊下ですれ違っても視線すら合わなくなった。けれど月に最低限一度、決められた二人きりの交流がある。学園が休みで王妃教育もない日に王宮を訪れ、第二王子殿下の終わりの合図があるまで、ただ二人で静かに茶を飲むだけの時間。イアンは互いに会話も交わさず茶を飲むだけの時間に意味を見い出せない。そのため、二回に一回は適当なことを言いつて断っている。当然第二王子殿下には予定を把握されていて、特別な用もないのに王族の誘いを断っていると知られていた。

それでも第二王子殿下は何も言わない。不敬だとも婚約についても何も。そういえば学年が上がった春頃、イアンが十六になった時に、いつも通りプレゼントは贈ってくれたけれど、初めて

「おめでとう」という言葉を直接貰えなかった。

イアンは心の奥底にしつこく芽生えるモヤモヤに辟易していた。モヤモヤの理由は毎回已でもよく分からない。ただ彼の顔を見るといつも何らかの昏い<sup>くら</sup>気持ちで頭を擡<sup>もた</sup>げて胸を搔きむしりたくなるのだ。搔きむしる前にしつかり廃棄しているので大きくはならないが、正直この謎のモヤモヤには鬱陶しさを感じていた。

そしてついにその日がやってくる。第二王子殿下との関係が冷えに冷え切っていた学園生活二年目の始め、イアンの誕生日が終わってすぐの頃に、平民出の神子がこの学園に入学してきたのだ。主人公は記憶に違わず秋も終わる頃に十五になり、すぐに神殿で二度目の儀式を行い、そこで白く眩い光に包まれたという奇跡の子どもだった。

神子になってからかれこれ半年前ほどかけて、最低限文字を書けるように勉強したり住まいを神殿に移したりと色々準備をしてこの学園に入学してきたらしい。そんな噂は瞬く間に広がった。ゲームでは「慌ただしく入学準備をして半年後にやっと入学できた」とナレーションがあつたが、なるほど。確かに田舎から王都に出たばかりの、文字も書けぬ平民が学園へ入学となると、最低でも半年はかかるだろう。そもそも王族側が「神子と良い関係を築く」という思惑を抱えているので、主人公が恐ろしく阿呆でも王族と同じ学年へ途中入学すると決まっていたはずだ。今回はちょうど同じ年の王族がいるから、当たり前のように二年からのスタートになった。

ちなみに色々と思惑のある現実と違い、ゲームでは主人公が中途半場な時期にこの学園へやってきた理由は語られない。ただただ「年下も出したいし、ルートによつては意中の人間が先に卒業し学園内では会えなくなるという状況も作りたい」というご都合主義的な理由でそうなっただけだと思う。年下と年上を相手にした場合のルートにそういう、独自のイベントがあつたはずだ。

イアンはゲームが開始されると、本当に記憶の中のゲーム通りだと戦慄したが、何をするでもなく傍観者を決め込んだ。それでも聞きたくもない話題は耳に入ってくる。異質な神子の存在は常話題の中心にいた。当然のように年齢やクラスがバラバラな攻略対象者たちが様々なきつかけで主人公に興味を持ち、至る所で主人公に構う姿を目撃するようになるのは直ぐのことだった。

『お前は本当に可愛い。アレとは大違いだ』

『アレって……婚約者様ですか？ アルフレート様の婚約者の方、とてもお綺麗じゃないですか、僕なんて……』

誰に聞かれるとも分からない廊下で、この白々しい会話である。主人公は一月もしたら第二王子殿下を名前で呼んでいた。イアンはそう呼んだこともないし呼んでいいと言われたことも無い

が、彼らはスムーズに信頼関係を築いているらしい。それにしても会話の内容が非常に不快である。「アレ」に対して即イコール婚約者と繋がるということは、己の知らぬところで散々馬鹿にされていると見て間違いないだろう。ぶん殴りたい気持ちを堪えて、イアンはモヤモヤを凍らせて叩き割った。

『時間だ、出ていけ』

『はい』

そして最終学年へ突入した頃には、第二王子殿下はイアンへの興味も気遣いも何もかもを失って、その目に映すのは主人公だけとなった。最低限の茶会は続いている。今までと同様に二回に一回は断つていてイアンの対応は何も変わらない。けれど主人公との仲が深まれば深まるだけ第二王子殿下は変わっていく。

誘いは従者の寄越した手紙一枚で、返答も直接ではなく手紙でいいと言われた。少し前までは茶会中限定ではあれど、視線を寄越されていたものだがそれも次第に無くなった。会話どころか挨拶の言葉すらなく、イアンの挨拶が空しく部屋に響くだけになった。婚約者同伴の社交へも主人公を取り合うようにして攻略対象者たちで参加しているらしく、イアンへ同伴の誘いがくることもない。こうして三年目の終わり頃には、二人きりの茶会では目も合わせず耐久で茶を飲み続け、一時間も

経つと冷たく「出ていけ」と吐き捨てられるようになったのだ。

『それでは御前失礼いたします』

（関わらないようにして正解だったわ。関わった後でこんな態度を取られちゃ、やってらんねーってなもんよ）

イアンはそう内心で思いながらも頭を下げて部屋を出る。何もしなかったから当然未来は変わらないし、ゲーム通り立派な当て馬ボジションになったのだが、邪魔立てすることもないので毒にも薬にもなっていないモブである。ゲームと違い主人公を虐めてもないし少しでも姿を見たら逃げるようにしているの、きつと婚約を破棄されたとして罪状は付かないはずだ。

思った通りに進んでいることに安堵するも、やはり出てくる謎のモヤモヤ。イアンは火炎放射器を構えてそれを燃やし、スッキリ爽快な気持ちを持続した。この不快なモヤモヤもゲームが終わってしまえば発生することがなくなるだろう。やっとこの嫌な状況から解放されるはずだ。

（そしたらやっと本当の人生だなー。俺金持ちの家の末の子だし好きにする。絶対人生謳歌してやる！）

イアンはその日が待ち遠しかった。

「イアン様、到着しました」

馬車が止まり、扉の外からニールの声が聞こえてハッとした。いつの間にか到着していたらしい。音も無く静かに馬車の扉が開くと、ニールが微笑みながら手を差し出している。それに微笑み返し手乗せて馬車からゆっくり降りると、相変わらず迫力のある白亜の城がドーンと目の前にあって、何度見ても頬が引きつりそうになる。

「ニール、一時間ほどだと思っから」

「……はい、お待ちしております」

「うん。いつもごめんね」

朝から暗い気持ちを悟られないように気を付けているイアンだが、ニールにはバレているのだろう。苦笑したイアンと同じように苦笑するニールから手を離し、背筋を伸ばして前を見据えた。

「じゃ、行ってくるね」

「はい。お気をつけて」

いつも一時間程度で終わるこの苦痛な時間のため、無駄に家の馬車を使うのは気が引ける。その上時間が短すぎて家に戻ることも城に馬車を停め続けることもできず、近くの馬繋場ばけいじょうで待機してもらっているのが大変申し訳ないところである。

（まあそれもあと少しだけ）

気合を入れて王城を歩くイアンの顔には既に表情はなかった。色んな人たちが忙しなく働きなが

らも、イアンを目にすると廊下の端に寄り頭を垂れるのにもやはり慣れない。その目に憐れみがあることにも。

（相変わらずめちゃくちゃ気まずい。王子が二人揃って神子に傾倒してるのはとつくの昔にバレてるし、それを諫めもせず傍観しているだけの俺のこともバレてるからなあ。色んな噂飛んでそー）

現在の家族の顔に泥を塗るつもりもないので城での振る舞いに手は抜けなかった。現世の両親と兄には情緒不安定さでかなり迷惑をかけた自覚がある分、これ以上の心労はかけたくないのだ。

「イアン様、こちらに」

「ありがとう」

王宮の使用人がイアンを案内してくれる。彼とも何度も顔を合わせたものだが、終ぞ笑顔を見ることがない。どちらかという嫌われているだろうことには気づいていた。イアンの予測では、彼は第一王子殿下の婚約者の支持者である。その支持する人間とイアンは立場が似ているためよく比べられるのだが、そちらの圧勝とはいかないので気に入らないのだろう。彼の仕事は完璧にも見えるが、イアンに心の内を悟られていることを考えると、まだまだと言っているのかもしれない。

無機質な使用人の後ろをノロノロついて歩きながら、きつともうすぐここへ来ることもなくなるだろうと感慨深くなる。イアンの青春のほとんどは王宮で完結するので、この白亜の城の中での思い出だけは多い。と言っても良い思い出は何一つないのだが。

将来結婚することはないと分かっている婚約者のために、身を粉にして学ぶ王妃教育の辛さは言葉では表せない。本当ならば何も考えずに学生の時間を楽しみ、友人を沢山作って思い出を作らなかった。そういうこともあってか、イアンを婚約者を選んだ王家に対しての憎らしい気持ちは今もなっても結構ある。こんな年になっても友人一人いないのは、決して王家だけのせいでは無いが、一割くらいは責任があると思っている。

友人を一人くらいは作りたいと、幼い頃はよく考えていたものだ。例えば最も顔を合わせる機会のある、第一王子殿下の婚約者と仲良くなるのはどうかと思ったこともある。だが、あちらがイアンのことをライバル視しているのが目に見えて分かり、面倒そうで関わることはしなかった。同じ空間で王妃教育を受けているにもかかわらず義務的な会話しかしたことがないので、あちらも仲良くなる気はないと言える。

では学園の生徒たちはどうだろうか。しかし、それもあり早い段階できっぱり諦めた。王妃教育で忙しすぎて同年代と関わるのがほぼ無いからだ。学園内でも元々他の生徒からなんとなく距離を置かれていた。婚約者との関係が微妙であることは見て分かりきっているの、皆が皆距離を測りかねていただろうし、イアンの固まった表情も問題だったように思う。

同派閥の人間は、とも思ったが、こちらは媚びが凄すぎて怖かったので、一定の距離を保ちそれ以上近寄らせたことがない。そのように色々と考え抜いた結果、ゲームが開始され終わるその時まで、イアンは家を一步でも出れば一切の欲を捨てると決めた。

ただ、己で決めたことなのになぜか地味に病んだことだけは解せない。友人が一人もおらず学園内でボッチ化が進みすぎると、人はどうやらメンヘラに進化するらしいのだ。日が経てば経つほど取り繕った笑顔すら失うイアンを見て、周りの人間が気味が悪いとか怖いとか陰口を叩いていたことも知っている。それでも特に改善することもなく淡々と日々を過ごしていたのだから、色々と下手くそだなと思う。もっとやり方はあったかもしれないが、それこそ今更だ。

そう言えば主人公によって様々な婚約関係が破綻した頃、一つだけほんのり怖いことがあった。他派閥からは感情がなさそうとすら言われるイアンは、その実心の中では色々と感情の起伏があった。実際同派閥の人間は、イアンのことを気が許せる人間には愛想が良い人だ、と思いつている。気が許せる人間など家の中にしかないのだが、他者からの見解はそうらしい。

だというのに、何処でもそこでも発情する己の婚約者である第二王子殿下を見つける度に心の中が空っぽになったような感覚になるのだ。己の心は死んだのかと戦々恐々としたものだ。

『……っ！ ま、待つてくださっ！』

『待てないな』

そう、例えば<sup>ひとけ</sup>人気が少ないとはいえ、窓が完全に開放されている空き教室で彼らの交わりを初め

て目撃した時、分かっていたのに、知っていたのに心の奥に特大のモヤモヤが発生した。即刻その全てを排気口のない掃除機で吸い込んで事なきを得たが、たぶんその辺りで完全に心がほぼほぼ無になったのだと思う。それからも二人のあられもない姿を度々目撃することになるのだが、イアンの中にモヤモヤが発生する頻度は脅威のスピードで減っていった。

特に最終学年になってからはモヤモヤは一切発生しなくなった。一応、イアンの中では「第二王子殿下に対する何らかの思いが完全に消え去った」と無理やり納得しているが、それにしては清々しいと思う気持ちもなく、かと言って彼らに何を思うでもなく日々が過ぎている。

まさか本格的に己は壊れたのでは、と不安になって鏡で笑顔の練習をしたのはわりと最近である。当然イアンの笑顔は美しく完璧だったので「なんだ、完全に見限っただけか」と心穏やかに過ごしている。好きの反対は無関心というので、きつと第二王子殿下に対して一ミリの関心もなくなったのだろう。

不穏なモヤモヤが出なくなっただけというものの、色んなことをやり過ぎるのが随分楽になった。「最小限の接触」をこのまま維持し、いずれ必ずこのゲームの舞台から抜け出してやる、という決意は変わらぬまま、本日も今までと同じく無難に婚約者との義務的な茶会をやり過ぎつもりだ。

それがまさか、ガラガラと平穏な日常が崩れていく始まりの日になるとは、想像だにしていなかった。



「お連れしました」

「入れ」

王宮の使用人が扉をノックし、中から了承の言葉があると仰々しく扉を開き、イアンに向かって頭を下げた。頭など下げたくないだろうにと思いつつも、微笑みもせず頭を下げて中へ入る。

「失礼いたします」

こちらをチラリとも見る気がないらしい第二王子殿下は、主人公の攻略対象者の一人とあって、やはりその顔はとても美しい。幼き頃は微笑んだり傷ついたり困ったりと様々な表情があったように思うが、最近では全くの無表情になってしまった。

否、よくよく思い出すとそういうわけでもない。主人公の前ではいつも優しく微笑んではよく話しかけているので、単純に主人公とイアンの好感度差の問題だろう。

「御尊顔を拝し……」

「いらん、座れ」

「はい」

言葉を遮られようと、もう筆舌に尽くしがたいモヤモヤは生まれない。己や他人の感情に振り回



されるのは疲れるので良きことである。言葉通り対面のソファに座ると、背筋を伸ばしてテーブルに広げられた菓子に視線を落とす。

「お待たせいたしました」

「ありがとう」

サツと王宮の使用人が淹れてくれた紅茶の匂いを嗅ぎ、ホッと一息ついてから口を付けた。それからただ静かに、目の前に並ぶ最近流行っているらしい菓子を遠慮なく摘まんで口に運んでいく。ちなみに既に第二王子殿下の興味は一冊の本に移っている。そちらの内容に釘付けで、時間になるまで視線がイアンに向くことはない。

王宮でよく利用する、いくつかある内の一つであるこの応接室は少し狭い部屋になる。狭いとは言ってもあくまで他の応接室に比べたら、というところで前世で言うところと十二畳以上はあるはずだ。ここは王族がプライベートで使用する人が多い場所だ。一応まだプライベートだという認識があるのだな、と不思議な気持ちになりながら美味しい菓子里に舌鼓を打つ。

実はこの菓子類はイアンを氣遣って出してくれたものではない。イアンに食べさせ、その反応を使用人から聞き出し主人公に渡すため、言わば味見役で食べさせられている。もちろん棚ボタで流りの馬鹿みたいに高いお菓子が食べられるのだから文句はない。口の中でホロホロと解けていく甘いお菓子里にほんのり口角を上げる。直ぐにスツと元の無表情に戻ってしまうが、これは使用人の

仕事を手伝っているのだ。美味しいよと一応教えてあげている。

(俺、優しすぎない？ どう考えても優しーよな、俺って)

誰も褒めてくれないので、イアンはよく頭の中で己を褒めることにしていた。病んでいた時になんとなくしていた苦肉の策が癖づいてしまったのだ。家族には、触れられたくない態度で示して踏み込まれないようにしているし、外ではボッチなのだ。相談相手は己しかおらず、気づけば脳内会議が得意な人間になっていた。全く笑えないが。

パバリと本のページを捲る音がする。イアンだってこんなにつまらない時間は本でも読んで過ごしたい。だが、第二王子殿下からは何一つ言葉が無いので何もできない。ぼんやりとテーブルの上にある紅茶やお菓子里に視線を集中させて、偶に視界の隅にいる微動だにしない人間を薄っすらバレないように観察したりするだけだ。

現状、この部屋には使用人や護衛騎士など、他の人間の気配は多い。多分この時間は優雅に本を読んでいる王族以外の全員が苦痛に思っているはずだ。何せ動きもせずただただ沈黙が続くのだ。やることが無さすぎである。

暇すぎるので脳内では今後の彼を思い浮かべて時間を潰すことにした。いつもと大体同じだ。このゲームの時間軸を乗り越えたらば、イアンはお役御免で婚約破棄を言い渡されるはずだ。最終学年となり数か月前には十八歳の誕生日も迎えた。例年通りプレゼントは贈られたが、遂には消え

物である高級なお菓子だけとなったので、その日は近づいていることだろう。

この綱渡りのような生活もあと半年ほどだ。そうすれば見事に婚約破棄されて自由になれる。ゲームの中では主人公が誰と結ばれるかによって婚約破棄されない可能性もある。というか、成立しなかった他の攻略対象者たちのその後が特に語られないので、婚約破棄されたのかかれて無いか分からないのだ。

けれど、イアンは婚約解消を目指してきちんと不貞の証拠を集めている。婚約破棄を宣言されたら証拠を突き付けて解消へもっていく腹積もりだし、もし第二王子殿下と主人公が結ばれなかったとて、どうにか解消する予定である。なにせメインのヒーローは第一王子殿下なので、第二王子殿下が振られる可能性は高いのだ。密かに王族との軋よみなき婚約解消の方法まで調べている。

最初から婚約解消を目指してはいたものの、実際に王妃教育を施されつつ浮気を目撃する日々を過ごすうちに「こんな男と結婚して堪るか!」という気持ちが悪く果てなく大きく育った。他の悪役令息たちが物語終了後どうするかは知らないが、イアンは絶対に結婚しない。

そもそもゲームの中の第二王子殿下は人が悪い。好きな人ができたならさっさと婚約を解消すればよいのだ。中途半端に婚約したままだからゲームの中のイアンは希望を捨てきれず、「自分の下に帰ってきてくれるはずだ」と信じ続けて結果的に心を壊した。現実のイアンからすると、アウト中のアウト、どれほど顔が良くとも付き合っではない男ナンバーワンである。

(はあ、まだかなー。今何分経った?)

イアンは既に二杯目になる紅茶を飲みながら内心で溜息を吐く。何もできない時間はともかく流れが遅い。毎回暇なので、今までのことやこれからのことを考えているのだが、それにも既に飽き飽きしている。この部屋には時計なるものはないので、大抵一時間もすると護衛騎士が己の懐中時計を確認し、サッと扉側へ移動しイアンが出ていくのを待つ。それが終わりの合図だ。

(あの野郎、早く時間進めろよ! ってか無理かあ)

ちなみにその護衛騎士は攻略対象者だ。とはいえまだ見習いなので隣には先輩騎士が並んでいる。割と凡庸な顔の人間が多い中、第二王子殿下とイアンに負けにくいくらい目立つ容姿をしているから分かりやすい。彼も完全に主人公に一直線となっており、あちらこちらで交わっている。主人公が現れるまでは婚約者に心の底から惚れ込んでいたように見えたのだが、こうもあっさり心変わりをするなんて、見ていて気持ちの良いものではない。

イアンと第二王子殿下の関係と違って、他の攻略対象者たちは婚約者と仲良くやっていたのを何度目にしていて。だから、イアンは彼らの変わり様を心底軽蔑したし、正直攻略対象者は皆嫌いだ。

ムスリとした顔で微動だにしないショーン・バリーは、前はもつと表情豊かに笑ったり困った顔をしたり、婚約者にデレデレしたりしていたはずだ。だが主人公に出会ってからというもの、獲物を狙うかのようにいつも目をギラギラさせていて正直怖い。そして隙を見て主人公に襲い